

# クセノポーンのオイコノミア思想 IV — 善き家政監督者と女主人の心構え —

関根 靖光

(平成8年9月30日受理)

## The Idea of Oikonomia in Xenophon's “OIKONOMIKOS” IV

Yasumitsu SEKINE

(Received September 30, 1996)

### 序

夫婦のパートナーシップによって、新居に自分達独自の空間秩序が首尾よく確立され(註1)、オイコノミアの達人イスマコス<sup>1</sup>の妻は内心ほっとしたことだろう。これからは万全の保管体制が敷かれるわけだから、物の所在が分からず右往左往することなどおそ無くなることになる。しかし家内秩序維持の最終責任者が未熟な自分であると思うと不安は拭い去れない。そこで彼女の片腕となって働く強い味方、タミアー(家政監督者)が選出されることになる。

本稿の前半は、彼ら夫婦が設定したタミアー選出のための基準、或いは善きタミアーの満たすべき資格条件の内容、また善きタミアー育成の特別教育などを、善きエピトロpos(主に農地での監督者)の場合と比較しつつ紹介しよう。

後半は、イスマコスの妻教育の最終課程にあたり、女主人としての心構えを考察する。

### I 善きタミアー(家政監督者)の資格と教育

#### §1 卓越したエピトロposの教育と資格

イスマコスは農地に、主人である彼の代理人いわば委託されたオイコノモスとして優秀な管理者(エピトロpos)を置いているのであるが、彼はそのような人物をただ優秀との折紙つきということで雇うだけにとどまらず、お眼鏡に合った管理者候補生を抜擢した後、自ら十分に教育を施し磨き上げていく(註2)。その教育課程は

次の5段階であった(以下すべての訳はクセノポーン著『オイコノミコス』のギリシャ語原典からの拙訳)。

第一課程：主人である彼及び彼の家族に対して好意を抱くようにする

第二課程：仕事に対し、細々と配慮の行き届く者にする

第三課程：仕事のプロとして、何が、いつ、どのように為されるべきか、具体的に内容を知悉し、実践できる者にする

第四課程：自分の部下達を統率できる者にする

第五課程：委託されている主人の財産をくすねたり、盗むようなことを控えるだけでなく、積極的に正しいことを行なう者になるようにする

イスマコスの考えでは、卓越した管理者を養成するためには、この5階梯だけで必要かつ十分である、が勿論、そのような教育は誰に対しても有効というわけにはいかない。特に次のような人物群は、たとえ教育が万全を期しても、配慮に富む者(第三課程)に導き難いのである。即ち、

(イ)そもそも、仕事の上で「配慮」する者になるよう教育しても無駄な連中

① 酒に対して自制心の効かない飲ん兵衛達

② 眠りに対して自制心の効かない眠りボケ達

③ 女神アプロディテーの所轄事項である色恋沙汰に夢中な連中

(ロ)「配慮」的な者への教育は可能であるが、工夫が必要な者達

① 儲けに熱中する連中

\* 狭山：教養部第2哲学研究室

イスコマコスはこのような輩がゆめゆめ選ばれないよう、その人となりをよく見極めた上で、資質のなるべく上等な者を幹部候補生として取り立てたと言える。当然、善きタミアー（家政監督者）の候補者選びにも、類似的な雇用方針が貫かれている筈であろう。該当部分を原文で見よう。

## § 2 善きタミアーの資格条件 — a 群

イスコマコスが対話者のソクラテースに語るには、「私たち（夫婦）は、誰であれ次のような人（女性）をタミアー（家政監督者）として任命することにしたので、つまり、（a）食物やお酒、それに眠りについても、そして男性との交際についても、私たち（の目）に自利心の極めて強いと思われる人、更にそれら（の性質）に加えて（b）極めて良い記憶力を持つと思われる人、また（c）（家政監督者として果たすべき仕事に対し）配慮に欠けることで、私たち夫婦から（罰として）何か悪いことを（自分の身に）蒙らないよう、前以て（自主的にいろいろ）心配りする点で極めてすぐれていると思われる人、それに（d）（その立派な仕事振りで）何らか私たちを喜ばせることによって、私たちから（ご褒美として、賞賛や）報酬を得られるよう熟慮する点で極めてすぐれている人」（原典 9-11）

最初の条件（a）を一瞥すると、前項のエピトロポスの資格条件と概ね対応していることが分かる。曰く、酒、眠り、それに男女の関係における強い自利心。ただ一点、女性の監督者には男性のエピトロポスには挙げられていない「食欲の自制」が要請されている。これは「食欲には性差あり」という考え方に基づくのか否か、今にわからず判定できないが、その問題とは別に、なぜ食い意地のはった人物が家政管理者として不適とされるかの問題は残る。その答えは原典中には語られていないが、クセノポーンの他の著作『（ソクラテース）回想録』の第2巻1章2節の、アリストイッポスとソクラテースとの問答から推察すると大体次のようになろう。

食い意地のはった指導者は、例えば国家緊急の一大事に直面しても、まず胃袋を満喫させることを優先して、救国の大仕事は二の次にしがちである。いわば、国滅んでも味覚の快楽は捨てるものか、といった亡国のグルメは国家指導者として不適格なのである。この考えを家政を論じるこの箇所を採用すれば、仕事よりまず団子の口は家政監督者としては不適格、後免蒙りたい、というこ

とであろう。

（イメージ：このような対話編という文学形式ではイメージによる解釈が枢要である。というのは著者が家庭経営の理論書を書くつもりなら、厳密に論理的な命題の展開でよかったからである。読者をも問答の生動的ダイナミズムに引き込み参画させる、しかも臨場感溢れたイメージを用いて、というのが対話形式の狙いであろう。ならば対話編は、その分析がたとえ論理的になろうとも最終的にはイメージを通して考察する必要がある。「対話には対話で！ イメージにはイメージで！」である。以下、その試み。

まず食い道楽。これは目の前のご馳走に目がないだけでなく、仕事中でも絶えず何かおいしいものを口に含んでいないと口淋しく仕事の手も休み勝で、豪勢な食卓の想像などに攪乱されて、仕事になかなか真剣に打ち込めない。

次に酒であるが、酒は酔うほどに娯楽の憂を晴らしてくれ、苦悩の一切が忘却の彼方に消え去るかのような錯覚をもたらすが、酔っ払いは、生活の糧である仕事自身も忘却の彼方に放り出してしまう傾向がある。

眠り惚けの場合は、仕事しながらうつらうつらの夢心地で、仕事に精出すよりも船を漕いでいる方が多く、家政監督者として下働きの者達を欣然と指導するところではない。

さて、男性関係であるが、誰もが一生に少なくとも一度は、恋焦がれて死ぬ思いということがあっても、恋心旺盛すぎて、いつも頭に、そのつどの彼のことしか思い浮かばない、ということになれば、家政どころではないだろう、監督どころではないだろう。

イスコマコスの妻は、実家で一々思い当たる節があったため、資格 a 群に関しては直ちに了解したことだろう。いずれにせよ、他の従業者に比して、仕事への配慮（エピメレイスタイ）の点で期待大なる家政監督者が、酒食眠色のために心ここにあらず、では家政が成り立つものではない）

## § 3 善きタミアーの資格条件 b, c, d, e

条件 a 群に続く諸条件、b, c, d, e のすべてに共通していることは、それらのどの条件もエピトロポスの場合には、原文に顕在的に表れていないということである。しかしもちろん常識的に考えてもそれらは、生活空間としての家の外部の監督者であるエピトロポスにも等

しく要求されるべき内容であることは間違いない。従って、タミアーにのみ限定するのではなくエピトロポス論と内的に関連づけて考察すべきであろう。以下、逐次的に解説していく。

第一に条件b、つまり「極めて良い記憶力」。監督者の種類が何であれ記憶力抜群の者に重要な仕事を委託するのは尤も至極なことである。タミアーの資格として特に取り上げられた理由は、原典9-10で言及されているタミアーの仕事内容から十分推察されることである。それによると、祝祭用・客人接待用・行事用などの貴重な道具類の保管は彼女の役目の一つであった。それら膨大な道具類を一々覚えておくだけでも生半可な記憶力では大変であろう。また、その道具の各々に対して適正な保管場所がイスコマコス夫婦によって決められていたのだから全道具類の詳細な保管図といったものも頭にインプットしておく必要がある。更に、道具類の各々に対し、いわば担当召使が決められていた。となると、道具と担当者の正確な対照一覧表ごときものも頭に入っていることが必要である。そして道具を実際に使う段になると、どの道具を、どの担当者に、いつ渡し、またその道具がいつ返却されるべきか、そして実際に道具は戻って来たのか来なかったのか、など明確に記憶しておかねばならないだろう。結局、プロとしての仕事を的確に遂行するためには、秀抜な記憶力が求められるのである。

条件cは概ね、「為すべき仕事に対して無配慮であることで、主人夫婦から叱られたり罰せられたりすることのないよう、前以て心配りする点で極めてすぐれている」ということであるが、叱られないように励むとは、チト消極的な態度のようではある。イスコマコスのエピトロポス教育（原典12-16）と対比させて、その内実を見ていくと、まず彼はエピトロポスの配慮能力を高めるために次のような点に留意している。即ち、その者達が十分に配慮を行なう度にそのつど彼らを誉め尊敬の意を表し、反対に無配慮（配慮に欠けている）の場合はそのつど彼らが心痛むことを言ったり実行したりする。つまり、正義に基づくエピトロポス教育を、平生から意識的に実践していたということである。ところでタミアーに対してもその配慮性高進のためにこの教育法が実施されないわけではない。かくして彼女たちは、無配慮であることで主人夫婦から叱られないよう罰せられないよう（原文では、何か悪いこと、禍が自分に及ばないよう）、頭も体も働かすということになる。と、ここまで聞くと、

なにやら恐怖政治を思い浮べがちであるが、その結論は少々短絡的である。この教育の眼目はやはり、「仕事の先々を読み、段取りをうまくつけ、道具類を準備するなど、用意おさおさ怠りなく予め配慮する（プロネイン）」側面を積極的に促進する点にある、と見るべきだからである。

条件dは、「立派に仕事をこなして主人夫婦を喜ばせ、その報いとして称賛や報酬が多くなるよう熟考する点で極めて優れている者」という位の意味になるが、これも§1で枚挙したエピトロポス教育と強い関連がある。エピトロポスを「優れた統率者」へと育成する第四教育課程と、「主人の財産に対し不正を犯さない者」にする第五教育課程の両方でイスコマコスが、「より従順な者、より良い者、より正しい者にはより多くの称賛や報酬を！反対に主人に不従順な者や実績のはかばかしくない者、また不正を犯す者には、それなりに少ない報酬とか罰を！」をスローガンにしていたことを想起せよ。更に彼が、ピロティモス（名誉を好み重んじる）タイプの人間と、ピロケルデース（儲けを重んじる）タイプの人間とを区別し、物質的報酬を願うより主人から称賛され、最終的に自由人として遇せられるようになることを熟望する前者の方を、「美にして善なるエピトロポス」向きとして高く評価していたことを併せて想起せよ。この同じ考え方が、家という生活内部空間の監督者であるタミアー教育にも反映しないわけにはいかない。仕事を立派にこなして主人夫婦を喜ばせ、彼らから大いに称賛され、自由人のように遇されることを最大の関心事とする気高いタミアー、彼女こそ「美にして善なるタミアー」として讃えられるべきである。条件dは、「物質的報酬が主目的で、その手段として主人をどう喜ばそうかズル賢く頭を使う切れ者」といった風には決して理解すべきではない。

以上、善きタミアーの資格にあたる諸項目を点検してきたが、あえて一つ疑問を呈せば、上記の条件を全部、同時に、しかも極めて卓越した仕方であつた者を見つけることは、実際問題として至難のことではないか。さしものイスコマコスも大分苦労したことだろう、しかし人を見分ける「主人の眼」の的確さにかけては人後に落ちないイスコマコスのことである。現有の使用人の中からという制約があつたとしても、彼なら必ずや最高の適格者を選び出していたに違いない。

#### § 4 「美にして善なるタミアー」教育第一課程

さてイスコマコス夫婦の厳正な評価を経て選ばれたタミアー候補には、楽しくも厳しい試練が待ち受けている。原石は教育によって磨き上げられねばならない。

「(あまたの召使の中から或る者をタミアー候補として任命した後) 私たちは彼女を(1) 私たち(主人夫婦)に対し好意を持つよう(エウノイコース エケイン)教育しました、それも①私たちが喜んでる時はいつも彼女にその喜びの一部を分与することによって、また②もし何か困難(苦や悲しみなど)があれば、(共に困難を分かち合い、共に打開策を考え相談し合うために)彼女をその同じ事柄へと呼び寄せることによって、更に(2)……」(原典9-12)

このように、まず第一に挙げているのが主人夫婦に対して好意を抱くようにする教育。これは正にエピトロポス教育の第一教育課程とぴったり照合する。その方法であるが、エピトロポスの場合にも、少しニュアンスが違うが同趣旨のことが勧められている。曰く、「主人夫婦(及びその家族)に対し神々が何か善いこと(ティ アガトン)を豊富に与えて下さった時にはいつも部下であるエピトロポスにも(分け前を気前よく分かち与えるなどして)善くしてあげる(エウエルゲティン)べし」

[ミニ解説:「苦楽を共にする」]、これがタミアーをして主人夫婦に対し好意的にさせる王道ということである。「喜びを分かち合う」とはいかにも情的な表現であるが、この情的な共感こそ主人とタミアー間に、肉親に近い親密な関係を齎らすことになろう。かたやエピトロポスの方は、ややビジネスライクである。彼に「分かち与えられる何か善いこと」には当然、情的、精神的な事柄も含まれるだろうが、「何か善いことが豊富にある場合」という表現から物質的意味合いが強いと考えられる。たとえ主人とエピトロポスが深い信頼関係で結ばれていると、その関係には依然として若干のよそよそしさが残る感是否めない。他方もちろんタミアーにも物質的利益の分与がある(次節参照)が、「喜びや悩みを分かち合う」という身内の近さに酷似する関係が第一に挙げられているということは、タミアーには利益分与の外的関係よりも、苦楽分有の温もりのある内的関係が最も基本的と考えられていた証左である。その理由は、タミアーの方は生活空間の一番内密なところ、いわば家の核、懐の部分で働く者だからだろう。生活空間はその核心部分や内・外の区別に応じて、その情的密度を異にするので

ある]

#### § 5 タミアー教育第二課程

タミアー教育の第二課程に話題を移す。これは第一課程を踏まえ、更にそれを充実させて理想的なタミアー像に一歩近付くために設けられた、と推定される。

「(第一課程だけでは理想像実現にはいまだ不十分なので)更に私たちは彼女を、(2)(私たちの)オイコスを共に増加させる(スュンアウクセイン)ことに熱心になるよう教育した、①それも彼女が(オイコス増大の過程の各段階に参与して、その隅々まで)知悉できるようにすることによって、また、②(オイコス増大に成功した場合は)繁栄の一部を彼女にも分与する(メタディドナイ)ことによって、更に(3)……」(原典9-12)

まず、「オイコス」の意味であるが、クセノポーンのオイコノミア思想の一連の私の分析から既にそれが単に「家」でなく、「クテーマタ(所有物)のすべて」を指すことは言うまでもない。

次に「オイコスのスュンアウクセイン」という表現であるが、これは原典7-15(註3)を思い出していただければ、妻が夫と協力して一緒にオイコスの増加をはかる、というコンテキストの中で全く同一の表現が用いられていたことに気付くだろう。かくして、夫妻のみならずタミアーも(主人夫婦が共有する)オイコスの増大に協力せねばならない。

その教育方法は、というと2策挙げられている。

①で説かれているのは(「スュンアウクセイン」をも併せ考えると)彼女をオイコス増大の過程の傍観者にしてはならない、どの過程の、どの段階においても、彼女が参与できるような開かれた体制をつくり、何が行なわれているのか彼女も間近で十分知りうるようにし、いわば家政決定のプロセスに彼女も準共同責任者として参加させるようにする、ということである。

②は、彼女自ら参画したオイコスの増加過程の結実に関しても、彼女を部外者の如くオミットすることなく「働いた者にはそれ相当の報酬を！」という正義の原理に基づいて、彼女の活躍に相応しいものをその結実の中から分与する、と解することができる。

さてこの第二過程は、エピトロポス教育の第二過程、即ち「仕事に対して細々と配慮の行き届く者にする」と(§1参照)に、文字面だけを比較するとピッタリ対応してはいない。しかし果たしてそうであるかどうか、エ

ピトロポス教育における第一課程から第二課程への移行の必然性に関わる議論（原典12-8～9）を見てみよう。

ソクラテース問うて曰く、「（第一課程の結果）彼があなたに対し好意を抱くようになるにしても、果たしてそれで（美善なる）エピトロポスであるために十分でしょうか。というのも、お互いに好意を抱き合っている人々の多くは、自分達にとってあらまほしいと願っている善き事ども（アガタ）が（そう心の中で願ひ口にも出していないでも、実際にも）そのようになるようにと配慮する気は（さらさら）ないのですから」

イスコマコス答えて曰く、「勿論その通りですが、そのような人々をエピトロポスに任じたい時にはいつも、私は彼らに対して、配慮することを教えることにしているのですよ」

つまり、主人に対して好意を抱くよう教育する第一課程によって、エピトロポスの主人夫婦に対する好意はいやましに深まるには深まるが、愛は深く広い、とはいうものの、そのままでは好意は無方向、茫漠不定なものにとどまる。そこで、明確な指針を与えねばならない。即ちその渾たる好意を、主人夫婦のアガタ（善き事ども）創出の一点に向けて絞りこまなくてはならない、ということ。第二課程は、いわば好意エネルギーに仕事への「配慮」という流路を与えて、アガタ創出の確たる道筋をつける工夫に他ならなかった。

タミアーの第二課程に目を転じると、エピトロポスの際の「アガタ」という抽象的表現に代わり「オイコス増大」という、イスコマコスの真意を更にストレートに表す語句が使われている。が、にもかかわらず両者の教育目的はほぼ一致すると判断できる。端的に言えば、主人から委託されたオイコスを、善きオイコノモスとして維持かつ増大させることへ一路邁進、細心配慮、ということである。但し実現方法は両者やや異にする。エピトロポスの場合は、「配慮の実行者には称賛と尊敬を！無配慮者には心痛事を！」が配慮教育の基本であったが、タミアーの方は、「オイコス増大」過程に（準）共同責任者として参画させ熟知させた上で、余剰の一部を彼女に還元する、といった、いわば家政管理者としての彼女の誇りを最大限尊重するやり方をとっている。とはいってもタミアーの資格条件cの項で考察したように、いったん彼女が無配慮（怠慢）ということになれば、たとえ親密極まりない立場を享受できる彼女であっても、怠惰なエピトロポスに匹敵する手痛いしっぺ返しを覚悟せねば

ならないのである。

さて、これまでのところタミアー教育とエピトロポス教育はほぼ一対一対応しているかの様相を呈していた。ならば、第三課程はどうか。

## §6 タミアー教育第三課程

「（第一、二課程も修得したとしても、やはりそれだけでは美にして善なるタミアーとしては不十分で、）更に私たちは（3）正義（ディカイオス・ユネー）（を尊び実践する気持ち）を彼女の（心の）うちに生じる（エム・ポイエイン）ように（教育）しました、それも①正しい者達を不正な者達より、より尊い者とみなし、そして②正しい者達の方が不正な者達よりも、より裕福に、より自由人的に生活する（ようになれる）ことを（身を以て分かるよう、はっきりと彼女に）示すことによって、

（以上のような全教育課程を経た後初めて）私たちは彼女を（正式に）かの（タミアーなる）地位に任命したのでした」（原典9-13）

この第三課程がエピトロポス教育の最終課程（第五課程；§1参照）に対応することは一目瞭然である。

エピトロポスの場合を原典12章に沿って少し詳しく紹介すると、まず教育目標は、「主人の財産に手を出すことを控え、決して盗みをしなようにする（つまり、不正を犯さないようにする）こと」にあり、そしてその目標実現のための方法論としては、基本的に以下のような、尊敬すべきベルシャ王のやり方を適用するとしている、即ち

① 正しい者達に対しては、

- i 不正な者よりも裕福にしてあげる
- ii その正しい者達が、単に正しければ裕福になれるという理由からでなく、主人から（純粋に）称賛されたいがために正しくある場合は、彼らを自由人のように遇し、ただ単に裕福にしてあげるだけでなく「美にして善なる者」として敬意も払う

② 良くしてもらっているのに不正を働く不屈きな輩に対しては、（彼らが何度）注意されても依然として不正を企てる場合、彼らをもはや矯正不能で強欲な者と見限って、（彼らを）使用することも止める  
これらの内容は上記のタミアーの場合と確かに一致する。

いずれにせよ、イスコマコスの正義教育の真意を読み

取ろうとすれば、その教育の重心が、「不正者を見付け次第罰し、矯正不能なら断然解雇する」という厳格な懲罰主義にあるというよりは、「誰であれ正しいことをした場合にはその行為を讃え、その者を称賛し、更に物質的にも懷を潤沢させ、なおその上に善行の動機が気高く美しい場合は、たとえ奴隷の身分であろうと、自分たちと同じ自由人の如く遇し、「美善なる人」として大いに敬意を払う」という、報償・人格主義的精神にこそあるということが見えてこよう。ともかくタミアーにせよエピトロポスにせよ、オイコノモス教育の要諦は、「美にして善なる」人間づくりにあり、と言い切れるのではないか。

ところで、ここでちょっと拍子抜けなのは、タミアー教育がこの第三課程でもう終了、つまり完成されたタミアーになるために第一、第二課程と続いてきたのが、この第三課程でもう十分、換言すれば、第一、第二、第三課程の履修だけで、理想的タミアーになるために必要かつ十分であるという雰囲気である。

すっぱり抜け落ちているかに思われるエピトロポス教育の第三および第四課程はどうなのか。タミアーには必要ない、というのか。

エピトロポスのための第三、第四課程を原典から復元すると、

#### 第三課程

教育目標：仕事に関し、何を、いつ、どのように行なうかについての知識を身につけさせる

教育方法：主人のクテーマ（所有物）である農地を活用しクレーマ（富）に変容させる農園芸学的知識や技を修得させる（この詳細は原典15章以下で展開）

#### 第四課程

教育目標：配下の者達を統率し、聞き従わせるような者にする

教育方法：

I 以下のような統率術を伝授する

- ① 動物にも有効な最も単純なやり方
  - i 不従順である場合はいつも罰する
  - ii 熱心に仕える場合には善く報われるようにする
- ② より人間的なやり方としては、聞き従うことが有益である旨を言葉によって諄々と説いて分からせる

③ 反抗する奴隷（的人間）の場合は、野獣の訓練のやり方も大いに有効。即ちともかくご褒美の飲食、餌で釣る（註：飲食欲が満足すればこの世はすべて良し、という単細胞人間にぴったり。とはいっても、きちんとやるべき事をした場合にのみ餌で釣るのである。下心があって無闇にただ酒を飲ますのではないことに留意）

④ 名誉を愛する気質の高い者の場合は、（報酬もさることながら）称賛に重点を置いて、名誉によって聞き従うようにさせる

⑤ 常に、いわゆる配分の正義を実践するようにする、即ち、実績優秀な者にはより良い報酬を与え、劣る者にはより劣った報酬を！ その原理は配給する衣服や靴にまで及ぶようにする。このような公正な態度により、配下の者達の信頼を得ることができ、聞き従うようにさせることができる

II 更に、エピトロポスが以上の伝授された方法を彼自らの部下達に本当に適用できるようにならしめるため、監督者の彼自身に対しても次のような教育を施す、即ち、彼が教えられた統率者（指導者）教育を生かして、最も価値ある者に最も優れた物を配分すればいつでも称賛し、逆に仕事もしないお追従者や親切ごかしの輩にだまされて連中を引立てるなどの不正を行なったら直ちに叱責し、連中が禍をもたらす者であることを諭す

タミアーには、上記の二課程がないのはこれ如何に、という先の問に簡潔に答えよう。まず第三課程であるが、これはタミアー教育にもちゃんと存在する。§3で既に触れたが、原典9-10には、タミアーの仕事の「何を」「いつ」「どのように行なうか」の主要例として、祝祭用・客人接待用・その他折りにふれて行なわれる行事用の道具類を、常時、指定された場所に保管し、それらを使用すべき時が来れば、その各々をそれぞれ適切な召使に渡し、使用時期が終了すれば、各召使が返却する道具類を確認した上で、一つ一つ元の場所に戻し、次の機会まで万全に保管する、ということが指摘されているのである。

他方、「善き統率者、指導者」を育成する第四課程の方はというと、祭事用などの高価な道具類を直接使用する召使達は恐らく彼女の配下の者達であろうから、それら部下の者達が上司の彼女の言うことに心服して「聞き

従う」者になるよう、彼女も当然、公正の正義の重要性などの統率者教育を十二分に受けるべきだろう（実際、彼女はその手の教育を受けた筈だと筆者は推測する）、が原文には該当する既述がない。その理由は何か、それは、タミアー教育にすぐ引き続いて展開されるイスコマコス妻教育（本稿の後段で論じる）から推断できる。彼は幼な妻に対して最後の決め出しを行なうがごとく、家政の最高の統率者は他でもない彼女自身であること、つまり女主人としての心得を、ここぞとばかり説き聞かせている。ということは、幼な妻が、すべてを取り仕切ってくれるタミアーおばさんの存在にすっかり頼りきって、これで安心これでラクチンと安堵しきってしまい、女主人としての気構えもプライドもあっさり棄ててしまわないように、また、統率者教育の眼目はタミアーではなく、妻にこそ残しているのだということを、妻にも、そしてタミアーにも、或いはその他誰に対してであれ鮮明に印象づけるために、タミアーの統率者教育は手控えた風の体裁をとったのではないだろうか。

さて、以上で1、2問題は残ったとしても、タミアーの資格チェックとカリキュラムはすべて終了。遂に大勢の候補の中から最優秀の召使一人が主人夫婦から正式にタミアーとして任命され、栄冠を得たことになる。

（イメージ：イスコマコスの妻は、秩序構築及び維持に関するガチガチに厳密かつ徹底した教育に圧倒されっぱなしだったが、タミアー採用のこの段階に至って安堵一杯の思いで心が満たされる。そして任命されたタミアー女史を眩しうに見つめる。その好意溢れる所作振る舞い、細かいところにも配慮の行き届く繊細で用意周到な精神、「正しいものは正しい、正しくないものは正しくない」ときっぱりと見極め適切に対処する態度姿勢の正義感に満ちた潔さ、また秩序維持の仕事についてはプロ中のプロといった手際のよさ、それに部下の者達からの信頼といたら働き手の中で随一。家政のすべてに未熟である幼い妻の目にタミアーはどんなに完璧に映ったことか。これからは家族の一員のように頼りにしていきましょう、何でも相談して協力をお願いしながら、と思わず彼女の口元は綻ぶのだった）

## II 女主人としての心構え

家という生活空間の内部に堅固な機能一構造的秩序が構築され、妻にも頼もしいタミアーを見付けることができ、イスコマコスもこれまでの作業の上々の首尾に満足

していることだろうが、仏作って魂入れずに終わってはならない。妻教育はいよいよその最後の段階へと登りつめていくことになる。

「ソクラテースさん、（秩序構築・維持・タミアー養成などに関する諸課程の）それらすべての後に私は妻に（作った仏に魂を入れる意味で）こう言ったんです、つまり、もし（辣腕のタミアーに頼りきって）あなた自身が、（構築された）秩序（タクシス）が各部分において存続するように気を配（エピメレイスタイ；配慮、管理する）らない場合は、（たとえ堅牢な秩序が構築され管理体制が整い、タミアー以下召使達が秩序維持の努力を行なったとしても）それらすべてのどれ一つとして（本当の秩序維持には）役に立ち（オペロス）ませんよ、と」（9-14）

（イメージ：夫の真剣な眼差しに、うーん、私の仕事に関わるとても重大な事が語られようとしているのだわ、と妻の顔に緊張が走る。私自身が秩序の細かいところにまで気を配らなくてはならない、とおっしゃっている、何でも気のつくタミアーさんが私に代わってやってくれないかしら、それにベテランの召使の人たちも私より立派に秩序維持ができるのではないかしら、でもやっぱりこの私が広大な館のすみずみに気を配らなくてはならないのでしょうか、と問いたげな若妻の見開いた目）

## §1 ポリス（都市国家）の公的存在の役割と妻の重責との類比

家内の秩序維持にとって最終的に妻の役割はどのようなもので、どの程度重要なものか、イスコマコスはポリスの公的秩序維持を引き合いに出して解説を始める。

〔閑話休題：このアナロジーは、家を国家（ポリス）と類比させ、家のオイコノミアを国家のオイコノミア（＝ポリテイア）と類比させる点でその後の思想史に一つの方向性を示していると言える。というのは、国家のオイコノミアを最大限にスケールアップすれば、宇宙（＝被造世界）のオイコノミアまで拡大されることになり、宇宙の創造主である神はその宇宙にオイコノミア的秩序を計画し実現する、いわば超オイコノモス（家政士）ということになるからである。初期キリスト教神学にオイコノミア思想が導入されたゆえんである。近代になると、例えばリンネに代表されるように、「自然のオイコノミア」という概念が汎通し始める。つまり、自然を一種の家と見立てそのいわば家政術として自然の秩序だった営

みを見るということである。この「自然のオイコノミア」は、ダーウィンにおいて“economy of nature”（和訳では誤って、「自然の経済」とされているが）という用語で使用され、19世紀後半にドイツのヘッケルによって、エコロジーという用語へと拡大的に造語された（註4）。オイコノミア思想史の出発点にあたるクセノポーンにおいて、家とポリスの類比が明確に出ているということは、オイコノミア（生活）－エコノミー（経済）－エコロジー（生態学）というオイコノミア概念の発展史にとって重要な意義を持つと言える]

さて、このアナロジーの利点であるが、家内の秩序維持がポリス全体の秩序維持と比肩されるほど極めて重要であるとの印象を妻に与えることができるし、何よりも、妻の役目のなかなか分かりづらい多様性を、恐らく妻もよく知っているポリスの多様な公人ないし機関に擬して、より具象的に説明できるといふ点にある。

イスコマコスの取り上げた、ポリスの秩序維持にとって必要な公人ないし機関とは、以下の4つである。

- ① 護法官達（複数；ノモピュラケス）
- ② 守備隊長（プルーアルコス）
- ③ 評議会（ブーレー）
- ④ 女王（バシリスサ）

これら公的存在の役割と妻のそれをイスコマコスがどう対比させて妻に語ったのか、その内容をまとめ、その上でミニ解説を付して、彼の主張の真意を付度してみよう。

#### ① 護法官達

- (a) 公的役割：法がよく遵守されているポリスでは、たとえ立派な法律が定められても、市民達にはそれ（だけ）では統治しているとは思われない。更に、護法官達をも選出する。彼らの役目は（法の）監督者として、合法的なことを為す者は称賛し、もし誰であれ法に反して行為するのであれば、その者を罰するのである

- (b) 妻の役割：妻に、自らを家の中の事どもの護法官と見做すように勧めた

[ミニ解説：即ち、家の中の確かに生活－機能的秩序や管理機構が構築され、維持されることになってもそれだけでは家が本当にうまく統治されているとはまだ言えず、更にその秩序を常時監視し秩序遵守者を称賛するとともに、違反者には厳正な罰を下す、家の秩序の護法官的存在が必要であり、妻が正にその役割を遂行するの

だと主張]

#### ② 守備隊長

- (a) 公的役割：守備隊を査閲する

- (b) 妻の役割：（守備隊長のように、そのことが適当と）思えるならいつでも、（家の）装備品どもを（あたかも守備隊に対するかのように）査閲するよう勧めた

[ミニ解説：イスコマコスは、以前その整理整頓的秩序の素晴らしさに感嘆したフェニキアの商船について妻に語り、それを手本に、妻と二人で家中の装備品、即ち家財道具類すべてをそのあるべき場所に配置して、家の機能的空間秩序を構築したのであるが、彼女が必要・適切と考えるならいつでも、それらが守備隊のように準備万端確かに整備されているかどうか、優れた守備隊長のように綿密に検閲点検すべきことを主張]

#### ③ 評議会

- (a) 公的役割：馬や騎兵隊達を（その公的適格性において審査し、適格なものは）公認する

- (b) 妻の役割：（評議会のように、道具類や部署の）各々が良い状態にあるかどうかを検査し（適格なものだけを）認めるよう妻に勧めた

[ミニ解説：新たに購入する道具類や、新たに配置する人間の適格性を検討・吟味して最終的にOKを出すだけでなく、現有の道具類や人間についてもその適格性や資格について、その是非の最終チェックを行なうべしとの主張]

#### ④ 女王

- (a) 公的役割：（自分の仕事をする十分な）能力が現に存在する（ことが示されている）という理由から、（その）価値ある者を称賛し尊重するとともに、それ（＝能力）が（現に）欠如している者は叱責し罰する

- (b) 妻の役割：妻には（女王のように、相応しい者とそうでない者を正しく区別して、その各々に対して正しい対応をするよう）勧めた

[ミニ解説：家の内部で使われている者達の業績を女王のように最終的に評価判断する者として、優れた者は優れた者として、劣る者や悪しき者はそのような者として、あくまで公正且つ厳正にはっきりと区別して対処すべきという主張]



（イメージ：もちろんイスコマコスの妻は、ポリスの公職について漠然とした知識しか持ち合わせていなかっただろう。まして夫の説明には、例えばエクセタゼイン（査閲する）などのような専門用語が含まれており、理解しづらかっただろう。にもかかわらず、護法官、守備隊長、評議会、女王が、それぞれ何らかの意味でポリスを代表するエライ人たちであることは十分感じていたに違いない。従って、家をポリスに見立てられて、自分が家の「護法官&守備隊長&評議会&女王」を併せ持った最高責任者になるよう説き聞かされた時の重責感、大変なものだったに違いない。果たして少女のような自分にポリスの最高権力者のようなことが実行できるのかしら。彼女の表情に不安が微妙な影を落とす。しかし、物事のポイントを的確に捉える聡明な彼女は、逡巡の末に夫の提案が思ったほど大きなものでないこと、むしろ当然のことに感じ始める。なにしろ、このオイコス（家や農地を含めたすべての所有物）は私たち夫婦共有のものであります。最終責任は二人で分かち合うのは当たり前だわ。屋外のことは夫が王として、屋内のことは妻の私が女王として（註5）。心中、彼女は自分の課された責任を引き受ける覚悟を決める。とはいっても、イスコマコスの目からは、妻の華奢な両肩は、重責を担うに余りに心細げに見え、それに妻の黙している様子が何か憤っているようにも見え……彼はどのように話したら妻が得心してくれるか、しばし思案する。そして徐に一語一語、妻の顔色を確かめながら語りだす）

## § 2 召使の立場との比較から、妻の重責の根拠を説く

ポリスの公的役割との類比談が妻に深刻な作用を及ぼしたらしいことを敏感に察知したイスコマコスは、彼女の気持ちをほぐし自分の主張の理屈を納得してもらおうと次のような論を展開する。

「（彼女の様子に少し心配になった）私はこの話に（すぐ）つけ加えて、彼女に次のような説明を施したのです。（公的な種々の役割と類比してあなたに為すべき役割を示しましたが、このことで）、所有物（タ クテーマタ）に関し、私があなたには召使達よりも多くの仕事を配当しているとしても、不当に憤ってはいけませんよ、と。（その理由として）私が指摘したのは次のような点です。即ち、召使（奴隷）達には主人の財産（クレーマタ）を運んだり、配慮したり、保全したり（ペレイン、テラペウイン、ピュラッテイン）するだけの権利は認め

られていても、それらのいずれも使用する（クレースタイ）ことは、主人が（その使用権を彼らに）与えていない限り許されていないのです。他方、（所有者である）主人（そして、あなたが正にその主人の立場の人なのですが）の方にはすべてが属している、即ち何であれ本人の欲するものの各々を使用すること（権利）が属しているのですよ、と。（更に彼女に）私が説明したことは、従って（財産を）保持することによって最大の利益が、また（財産を）破壊することで最大の損害が生じることになる（あなたのような主人の立場にある）者には、（やっかいかもしれませんが）配慮（エピメレイア）が最高に相応しいのですよ、と」（9-16~17）

この議論は明白に、「故にあなたに対し、クテーマタに関して、召使達とは段違いの、ポリスの公的役割に準じる最高の配慮的重責が課せられたとしても、憤ることなく納得して実行するよう努力しなければならないのですよ」という結論を目指したものであるが、幼い妻には論理的に少々難解な内容だと思われる。なるほど論理性がどうあれ、結果として当の妻が論点を確実に捉え納得すればそれで良し、と言えなくもない。がしかし、イスコマコス（≡クセノポーン）の主人論の一端を理解するためにも、ともかく議論の論理的構造を分析してみよう。その前にちょっとコメント。

〔コメント：いま、オイコノミア思想を何らかの仕方ではベースにしている神学をオイコ神学、或いはエコ神学と呼ぶとすると、現代、地球規模の環境危機をきっかけに、世界と人間と神の関係について根本的に再検討する気運が高まり、それに呼応するようにエコ神学が登場し始めている。特に、世界をめぐる神と人類との関係が焦点の論点となるが、上記のイスコマコスの発言中の、すべての所有物を保有しそれらを自由に使用（し、更に処理・享受できる）主人を、神の立場とみなすか、人類の立場とみなすかによって、エコ神学も大きく2分されるだろう。前者を採ると、神こそ真の主人、真の所有者で、人類はその所有物を神の許可を承けた限り使用できる、ということになる。勝手に使用することや預けられた所有物を損傷したり破壊したりすることなどは契約違反であるし、まして自分が主人であるかのように振る舞うようになり、勝手に使用し改変し処理し享受しつくすなどと言ったことは、とんでもない背任行為となる。この立場も2つあって、すべての生物の中で人類はいわば召使の中の筆頭で、ターミアとかエピトロポスといった管理

者的存在、或いは委ねられたオイコノモスの存在（スチュワードシップ神学）であり、神の家の管理、他の生物のお世話や環境の整備保管などの役目を担うとする。もう一つは、人類も含めすべての生物（無生物も含める場合も考えられる）は、主人である神からそれぞれの特性や世界の秩序内のニッチ的役目に応じて、神の所有物を任されている。その限り、権利上、平等であるというもので、自然の自然権をも主張する立場と言えよう。そのどちらも、神が主人（超家政士）で、人類や他の存在者は、神から所有物に関して、使用権或いは他の種々の権利も含めてただ委ねられただけの者すぎないとする点で共通なのである。ただ被造物間に人類を頂点とする階層を構想しているか、組合的平等を構想しているかの違いだろう。他方、人類＝主人の立場では、神の存在を認めたとしても、神はこの世に関しは人類をすべての他の被造物の文字通り主人として立て、その所有や使用等に関しては、堂々と好き勝手にやられていると見做す。しかしこれは、自然に対する人類の余りに奢り高ぶった所業が世界全体の破滅を予感させる現代においては、単純に首肯しにくい考え方ではある。しかしどの立場に立つにせよ、イスコマコスのみアールやエビトロボス論を含めた主人－召使論は、エコ神学的観点から、神と人類の関わりや自然と人間の関係を黙想するための非常に良いテキストになりうるのである」

さて、原文に戻るとして、それでは節を改めて上記のテキストの論理的解析に着手する。

### § 3 権利構造の観点からの主人論

まず、イスコマコスの発言のコンテキスト的部分は削ぎ取って、核心的意味のみを抽出し、しかも分析に必要な限り、元の言明をいくつかのより単純な言明、というより命題に分解し、そのような操作で得られた単純な命題群を一応、発話順に並べてみると、

- A：「所有物に関して、主人は召使より多くの仕事（護法官&守備隊長&評議会&女王の仕事）が配当されるのは当然である」  
 B：「従って、主人はそのことで憤るべきではない」  
 C：「召使には主人の財産を運んだり、配慮したり、保全したりするだけの権利が認められても、そのいずれも使用することは主人がその権利を与えていない限り、許されていない」  
 D：「他方、主人は自分の財産のすべてを欲するがま

まに使用できる」

E：「従って、財産を保管することで最大の利益がありそれを破滅させることで最大の損害を被る者には、配慮が最高に相応しい」

じーと眺めていると、Aの「主人」と、Eの「財産を保管することで最大の利益がありそれを破滅させることで最大の損害を被る者」が対応するように発言されていることが分かり、そうなると命題AとEがほぼ重なることが見えてくる。図の各々の番号が対応箇所を示す。

A：[主人]<sub>①</sub>には[召使より多くの仕事]<sub>②</sub>が[配当される]<sub>③</sub>のは[当然]<sub>④</sub>。

E：[財産を保管することで最大の利益があり、それを破滅させることで最大の被害を被る者]<sub>⑤</sub>には[配慮]<sub>⑥</sub>が[ナシ]<sub>⑦</sub>。[最高に相応しい]<sub>⑧</sub>。

又、これらA⇔Eから命題Bが結論されることも見えてくる。B：「従って、（その者に当然のこと、最高に相応しいことを）憤るのは不当である」

このA⇔EからBへの論理的流れは、無理ないものとして理解できる。しかし問題は残る。つまり、Aの[主人]に対して、Eの[財産を保管することで最大の利益があり、それを破滅させることで最大の損害を被る者]（以下、E[最大利害者]と略す）が対応するにしても、果たして何故にA[主人]＝E[最大利害者]と言えるのか、いや、E[最大利害者]に対してE[配慮が最高に相応しい]が述語される必然的つながり自体も直には明らかでない。他の命題も参照する必要がある。

さて二つの命題C、Dは、一方のCが召使の使用権が主人の許可に依存する限定的なものであることを言い、他方のDが主人の使用権の無制限を指摘している点で、対照的に一対となっている。両者の主張をまとめると概ね次のようになる。

	主 人	召使（奴隷）
所有権	全面的にアリ	全面的にナシ
使用権	（本人の欲するがままに） 全面的にアリ	主人に許されている範囲のみ（せいぜい主人の財産の運搬・配慮・保全など）

これらの主張が、どのようにしてE[最大利害者]、更にはE[最高に相応しい]へと思考がつながるのか、理解促進のために、原文のこの箇所用語としてはない

が内容的には確かに伏在する「享受」という概念を補助的に導入して考察を続けよう。

「享受」とは、「自ら所有している物か、それとも所有者から委ねられた物かは別にして、またその使用者が所有者本人か或いは委託された者かは別にして、ある物の使用から結果するところの結実を受け取る（自分のものにすること）」と、とりあえずのところ定義（定義1）しておく。例えば果樹園の所有者或いは委託された者が、果樹園を使用して、その結実としてできた果物を自分の物とすることなど、「享受権」とは、そのような意味で「享受する権利」を指す、としよう。

実はこの用語に似た考えは既に原典7-27に見られる。そこでは、夫婦がパートナーとして各々どれだけ日常生活の営みの中でオイコノミア活動に貢献するか、その点での優劣によって、それぞれに対し応分のアガトス（善、利益分）が配分としてもたらされる（ペレスタイ）権利が神により授けられている（保証されている）、とのイスコマコスの弁がある。ここで使用された単語を活用すれば、「享受権」とは「（働いた結実としての）アガトスを受け取る（ペロー）権利」と言いなおして良いだろう。

さて早速、用語「享受権」を用いて、E〔保管することで最大の利益が、そして減ぼすことで最大の損害が生じることになる者〕の下線部分、および言明されていないがそれに対応する召使の部分、次のように対照化させて理解しよう。

	主 人	召使（奴隷）
享 受 権	所有権も使用権も全面的に自分にある所有物を使用した結果生じる結実を享受する権利が最大限にある	所有権は全面的にないが、主人の許可によって使用することが許される物事があり、そのような使用の結果の結実物は、主人からの許可の範囲で、或る程度享受できる

ところでこの表では、Eの一部、つまり「善き結実である利益を最大限に享受するのか、それとも限定的にしか享受しないのか」の対比しか表されていない。Eの他の部分、「悪しき結実である禍や損害」を「被る」事態に関する対比は、享受権の概念にどう盛り込めばよいだろうか。

それは「享受」という概念を、イスコマコスの発想に

近付ける形で定義し直すことによって可能となる。

「享受」の定義2：「自ら所有している物か、それとも所有者から委ねられた物かは別にして、またその使用者が所有者本人かそれとも委託された者かは別にして、ある物の使用から結実する結果をそれが善きにつけ悪しきにつけ、つまり利益（アガトス）であろうと損害（ゼーミア）であろうと、それを受け取る（身に引き受ける）こと」

下線部が先の定義1との相違箇所である。簡単に言えば、定義2では、使用による善い結果だけでなく、悪しき結果も考慮に入れられている。またその結果の享受は、（神の裁定に基づくかのように）何か運命的に引き受けざるをえない事のように理解されている。まあ、それが善いものなら嬉々として受け入れることになるだろうが、とにかく用語「享受」が、ポジティブな事物の「享受」の意としてだけでなく、ネガティブな事象に対しても使われることになる。この定義2の「享受」の立場から、命題Eの内容を一応最終的に確定した形で再度対照表に表すと、

	主 人	召使（奴隷）
享 受 権	所有権も使用権も全面的に自分にある所有物を使用した結果生じる結実、それが善い物つまり利益であれ悪い物つまり損害であれ、最大限に受け取る（身に引き受ける）ことになる、もちろん通常の意味での利益を受け取る全面的権利がある	所有権は全面的にないが、主人にその使用が許される物事があり、その使用の結果の結実、例えば利益は、主人が許す範囲内で、受け取ることができる。他方、損害は直接には主人の方に跳ね返るが、自分も何らかの形で身に被らざるをえない、また主人に全面的に依存した立場のため、主人の失敗は即召使の損害に通じる危険性大である

「利益」の「享受」ならまだしも、「損害」の「享受」とはハテ面妖な！、ということかもしれないが、結局、例のオイコノミアの原理（註6）を想起すれば、理解も十分に可能となろう。復習すると、オイコノミア母型は下図の用であった。

基本型

クテーマタ（所有物）としてのオイコス



オイコノミア術の知識とその活用



クレーマタ（富）としてのオイコス

逸脱型

クテーマタ（所有物）としてのオイコス



オイコノミア術の無知



ゼーミア（損害）としてのオイコス

この図に、所有権、使用権、享受などの権利関係やその主体を付記すると事態は更に明瞭になる。

基本型

主人が所有権を持つクテーマタ  
としてのオイコス



オイコノミア術による正しい使用

（但し、その使用者が本来の使用権を持つ主人なのか、それとも主人から使用を許可された者、ないし使用権を委ねられたオイコノモスかは問わず）



クレーマタとしてのオイコス+剰余

（但し、この享受権は本来主人にある、召使達には主人に許される限りでの享受しかない）

逸脱型

主人が所有権を持つクテーマタ  
としてのオイコス



オイコノミア術の無知ないし間違った使用（その使用者が、本来の使用権を持つ主人であろうと他の託された使用者であろうと）



ゼーミア（損害）としてのオイコス

（この損害は、所有権、使用権の大元である主人を最も手酷く直撃する。つまり、主人は損害を享受せざるを得ない運命にある。主人が損害を被れば、親亀の背中に乗る子亀、孫亀よろしく、召使や委託されたオイコノモスもずっこけることになる）

オイコノミア活動の適否によって、「享受」の内容が吉と出るか、凶とでるかが決定され、しかもその影響が

最大限に表れるのが主人その人となれば、自らオイコノミア活動に精を出さないわけにいかないのではないか。実際に働くのは御大自らでない、というのであれば、委託された働き手達が主人に代わってがんがん活動できるよう、正しく清く実践するよう、少なくとも常時眼をかつと見開いて、監督業くらいは精出すべきだろう。いずれにせよ、主人には優雅で浪費の閑暇はない筈である。一歩間違えれば、全オイコスの崩壊と危険が常に表裏一体ということであれば。

かくして命題Aの、「所有物（のクレーマタ化）に関して、主人には召使達より、より多くの仕事（つまりオイコノミア活動に直接・間接に関わる多様な仕事）が配当されている」という主張、また命題Eの、「（財産を上手に）保管すること（即ち、オイコノミア活動の一環）によって、最大の利益が、また（オイコノミア術の無知や不活動による財産の）滅亡によって最大の損害が生じることになる（主人の立場にある）者には、（オイコノミア活動の中核である）配慮（に邁進すること）が最高に相応しい」という主張、その両方ともいまや得心のいく内容であることが分かる。つまり、直接的にせよ、間接的にせよ、配慮や保管などのオイコノミア活動の出来不出来によって善かれ悪しかれその活動の結果を最大限享受せざるを得ない立場にある主人。その主人が、オイコノミア活動に磨きに磨きをかけ、（召使より）多くの多岐にわたるオイコノミア活動に誠心誠意取り組むなんてことは、至極当然、自覚して自発的になすべきことなのである。従って結論Bが導かれる。「主人が召使たちより多くの仕事を配当されているとしても、（至極当たり前なのであるから）妻よ、不当に憤ることなかれ！」

以上、内容的には紆余曲折の感があったイソコマコスの上述の議論は、解説してみれば、なに理路整然のこと、思わず納得と、わが膝たくく心境ではあるが、かの幼い妻は夫のもって回った晦渋な論に附いていくことができたろうか。それが心配なのは我々だけにあらず、ソークラテースも正にその一点が気掛かりの様子、次の問いが醸し出す情感がその証拠。

§4 あっぱれ、賢妻なり！

「（妻の憤りを宥めるかのようなイソコマコスの説明を聞いていたソークラテースは、彼女の反応がどうしても気になり始め、彼に恐る恐る尋ねる）どうでしょうか、イソコマコスさん、奥さんはそれらを聞いて、どうにか

あなたの弁に聞き従うことになったのですか」(9-18)

恐らくイ斯科マコス(喜色満面、目を輝かせ、待ちましたとばかり、とっておきの内容をソークラテースに報告する。

「(聞き従ったかですって? とんでもない、黙って聞き従うどころか、私の言いたいことの要点をズバリ掴んで、実に冷静に自分の意見を披瀝したんですから、いや、聡明そのものの我が)彼女が、もし次のようなことを私に言わなかったなんてことがあった方がそれこそ何事か、といった具合ですよ。(と、いつも謙虚なイ斯科マコスに似ず、自慢げに鼻をひくつかせる。さて彼の語る妻の特筆すべきスピーチとは?)」(9-18)

「(彼女が言うには)私が(彼女に余りにも)堪え難い事(カレバ)を課したのではないか(だから憤っているのではないか、など)と思っているならば、私は正しく認識していることにならないでしょう。(自分の)所有物(タオンタ)は(自分)が管理(配慮する; エピメレイスタイ)せねばならないのですから、と(そう、あの年端もない)彼女が説明したんです。というのは、(更に)彼女の言うことには、もし私が彼女に、彼女自身の物に無頓着で(アメレイン)ありなさいと(非常識にも)要求していたとしたら、そのことの方が、自分のアガタ(善、益)を配慮する必要がありますよと(召使たちより多くの仕事を)要求するよりも、ずっと堪え難い事(カレポテロン)だったでしょうに」(9-18)

ソークラテースに妻の賢女ぶりを話すイ斯科マコスの誇らしげな様が想像できる。そう、自分の財産に無頓着であることの方が堪え難い、とのセンスはそんじょそこの富裕な夫人の持ち合わせぬもの、だからこそイ斯科マコスはあまたの候補の中からこの少女を、結婚生活の替えがたいパートナーとして娶ったのだらう。いずれにせよ、彼女の口吻のなんと決然としていることか。「美にして善なる妻」の片鱗がキラリ輝き出ている。イ斯科マコスは、アッパレなり、我が賢妻!と、心中深く喝采を叫んだことだらう。彼の感銘の辞。

「賢母にとって、自分の子供たちに対して無頓着である(アメレイン)ことより面倒みること(エピメレイスタイ)の方が、当然、より容易いことだと思われませんが、丁度のように(我が妻のような)賢妻にとって自分の

物として楽しんでいる自分自身の所有物(クテーマタ)に対して無頓着である(アメレイン)ことより、配慮すること(エピメレイスタイ)の方が(たとえその仕事が召使より遥かに多くまた責任重大なものであったとしても)、思うに、より快い(エーディオ)ン)ことだ、ということすな(心地よい余韻)」(9-19)

イ斯科マコスの言を、何かおのろけのように聞いていたソークラテースの脳裏に、思わずかの悪名高い妻クサンティッペーの影が亡霊のように浮かび、頭をぶるっと振った彼の口から、慨嘆とも感嘆ともつかぬ言葉が発せられる。

「やあー、ヘーラー神にかけて、イ斯科マコスさん、(よくぞ)奥さんの雄々しい精神(アンドリケーディアノイア)を(見事に)明らかにしてくれました、(いやいやご馳走様、それに比べうちの妻は……ブツ、ブツ……)」(10-1)

当然ですよ、とばかりに顔くイ斯科マコスの満足気な顔のズームアップ。

## 註

- 原典：Marchant, E.C. : Xenophontis opera omnia II, Oxford, 1921, Reprint 1958
- 1 拙論:クセノポーンのオイコノミア思想Ⅲ—夫婦のパートナーシップと秩序論, 東京家政大学研究紀要第35集, 1995年を参照のこと
  - 2 原典12章を参照
  - 3 上掲の拙論:クセノポーンのオイコノミア思想Ⅲ
  - 4 拙論:エコロジー思想史の素描—ヘッケルからリンネまで, 上智大学人間学研究室発行, 21世紀の人間教育に関する研究報告集3, 1996年, P75~88
  - 5 上掲の拙論:クセノポーンのオイコノミア思想Ⅲを参照。あらゆる意味で民主的平等主義のイ斯科マコスの夫婦のパートナーシップ論で唯一引っ掛かるのは、性差による役割分担論である。この論文で彼の議論を分析し、その論理的欠陥を摘出している
  - 6 拙論:オイコノミア思想の一原像, 上智人間学紀要22, 1992年を参照のこと(この論文が、「クセノポーンのオイコノミア思想Ⅰ」にあたる)